

## 会 議 記 録

高松市附属機関等の設置、運営に関する要綱の規定により、次のとおり会議記録を公表します。

会 議 名	令和3年度第2回高松市創造都市推進審議会
開催日時	令和4年2月15日(火) 10:00～12:00
開催場所	Web会議（来場者用：高松市役所11階113会議室）
議 題	(1) 第2次高松市創造都市推進ビジョンにおける令和2年度実績について (2) その他
公開の区分	<input checked="" type="checkbox"/> 公開 <input type="checkbox"/> 一部公開 <input type="checkbox"/> 非公開
上記理由	
出席委員	佐々木会長、真鍋副会長、西成委員、大久保委員、木村委員、三井委員、小池委員、中西委員、香西委員、藤田委員、平野委員、原委員、植中委員、篠田委員、杉ノ内委員
事 務 局	長井創造都市推進局長、石川創造都市推進局次長兼産業経済部長、次田文化・観光・スポーツ部長兼文化芸術振興課長、白井農林水産課長、吉峰観光交流課長、佐野美術館美術課長、田中男女共同参画・協働推進課長、上原市場管理課長補佐、今池産業振興課長、山下産業振興課長補佐、三浦産業振興課創造産業係長、岡本産業振興課主査
傍 聴 者	0 人    (定員 3 人)
担当課及び 連絡先	産業振興課 創造産業係 839-2411

### 審議経過及び審議結果

- 1 開会  
(事務局から開会挨拶)
  
- 2 議題(1)

【会長】

それでは、議題（１）について議論を進めていきたい。事務局から配布資料の説明をお願いしたい。

（事務局から配布資料【資料３】について説明）

【会長】

それでは最初に、今回、事前に議論すべきテーマをいただいておりますので、資料のご説明をお願いしたい。

【委員】

１つ目に、交流プロジェクトの「観光客受入環境整備事業」について、丸亀町商店街では、フリーWi-Fiが利用できるが、ほとんどの高松市関連施設ではフリーWi-Fiが使用できない。フリーWi-Fiは、皆さんが自由に使えるような形にしていただかないと、今からのIT時代には、ついていけないのではないかと思う。

２つ目に、交流プロジェクトの「高松市文化芸術ホール改修事業」について、天井照明はLEDを使うと思うが、白色光だと本来の色が損なわれる。高松市の美術館は、白色光そのままで行っている。電灯色を混ぜ合わせると、自然に近い光が出るので、やはり電灯色を交えた形でしていただいたほうがよいのではないか。

３つ目に、交流プロジェクトの「高松市市民活動センター運営事業」について、瓦町FLAGの８階を皆さんに身近なものとして、もっと使っていただくことが大事ではないかと思う。

「広報高松」で、広報活動はしているとは思いますが、宣伝が足りないと思う。ホームページをもっと活用しつつ、「広報高松」にQRコードを載せ、皆さんがホームページにアクセスしやすいようにすればよいと思う。

【会長】

ありがとうございました。以上、３点の質問が出ているので、まず、事務局からそれぞれお答えいただきたい。

【事務局（観光交流課）】

1点目のフリーWi-Fiの件だが、観光交流課が所管している施設や交通の結節点などの観光客がたくさん訪れるような場所を中心に、「かがわWi-Fi 高松」というSSIDのWi-Fiを整備している。また、商店街では、丸亀町商店街に限らず、中央商店街8町商店街のアーケード下の公共空間部分に「かがわWi-Fi 高松」を整備している。

高松市の様々な施設で、フリーWi-Fiを入れることについては、各施設の目的や利用者へのサービスをどこまで高めるのかという部分で、個別の事情等を勘案しながら整備していく必要があるかと思う。

観光の観点からだけ言えば、フリーWi-Fiは、インバウンド、つまり外国人の方に対する通信環境を提供するという観点で整備をしているので、当然、日本人の方も使えるが、その費用対効果を考慮し、どれぐらいコストをかけて、どのエリアぐらいまで広げていくかというのは、常に社会環境の変化を見ながら、引き続き、今後も検討していきたいと思う。

一方、世界全体が5Gや6Gといった、次世代の通信環境になっていく中で、公衆無線LAN、フリーWi-Fiのあり方というのも、やや根本的に見直す必要が出てくると感じている。

いずれにしても、そういう社会環境を見ながら、行政サービスとしてどこまでフリーWi-Fiを整備していくのかということについては、検討していきたいと思う。

【事務局（文化芸術振興課）】

2点目のサンポートホール高松の改修工事について、令和4年度から令和5年度にかけて改修工事を行うが、天井照明については、基本的には、現状のホールの雰囲気に基づき更新する予定である。一般的に、色温度、ケルビンが高いと白色から青みを増した色合いになり、ケルビンの数値が下がると赤みを増した色になるが、ホール内の照明については、その利用目的に合った照明の色合い、或いは客席の上部や舞台上部といった場所の違いによって、照明を組み合わせる計画になっている。

また、高松市美術館の照明の話もあったが、通常、展示室は3,000ケルビンの、やや暖色系の照明を使用している。ただ、現代アート系の展覧会においては、作家の希望により、フィルターを入れることでケルビンの数値を変えて、白色系の照明にすることがある。

いずれにしても、展覧会や作品に合わせた雰囲気のある照明の演出も考えており、その辺りは適切に対応してまいりたい。

【事務局（男女共同参画・協働推進課）】

3つ目の市民活動センターの広報活動について、まず、瓦町FLAGを身近なものとして推進すべきであるという点だが、市民活動センターについては、「中間支援組織」として、市民活動に興味を持っていただけるような、市民活動のきっかけになるような場を提供しながら、市民活動団体等のニーズに合わせた講座等を開催するとともに、市民の方々に気持ちよく安心して利用していただけるよう、親しみやすい窓口づくりに努めているところである。

また、ご承知のように、このフロアは、市民活動センターのほかに、4施設あり、複合的なフロアとなっていることから、各担当課とも協力しながら、市民の方々が利用しやすい環境整備に努めてまいりたい。

「広報高松」の活用等について、市民活動センターでの講座等については、随時、広報掲載依頼等しているものの、広報は発行が月1回となっており、紙面に限りもあることから、掲載されていないことも少なくない。その状況を考慮し、市民活動センターのホームページはもとより、市民活動センター独自での情報誌として、「コラボ高松」や「情報誌ココラボ」を発行し、市民活動センター等の講座の情報や活動状況を情報発信している。

ご提案にもあった、QRコードの活用等については、各講座のチラシ等になるべくQRコード等を活用しているところだが、今後も活用を進めていきたい。

【会長】

ありがとうございました。

瓦町FLAGは、この審議会も開催した場所であり、様々なイベントでも活用されている。質問があったように、「広報高松」にQRコードなどを載せればもっと簡単に情報を得られるということで、これについては改善をするという方向で考えを伺った。

それでは、他に、事業の取組についてご意見を伺いたい。

### 【委員】

芸術士派遣事業の関係者として補足させていただくと、本事業は今年度から、希望する施設の全てに芸術士を派遣するという風に大きく方針が変わった。具体的には、これまでは43園に年間40回ほど派遣していたが、今年度は73園の希望に対し、予算は変わらないので、回数を約半減して、大体月2回の割合で、年間22回派遣するという事になった。当初は、上半期だけで22回、下半期だけで22回と、前後に分けるという案もあったが、通年で子どもたちと関わりたいという芸術士の熱い希望が多く、年間で延べて22回派遣するという事になった。

ところが、昨今のコロナの状況で、特に2月・3月は、急に、派遣先の施設で陽性者が出たとか、子どもたちにかかなり広がってしまして、施設の方から中止や延期をするという声が多くなってきており、派遣されず、事務局に来ている芸術士も増えてきた。しかし、幸い、希望する73園に行けるようになったということで、派遣先の施設の皆さんには大変喜んでいただいているという状況である。

あと、12年やっている中で、やっと周辺市町の善通寺でも、この夏から回数は少ないが、実験的に事業が始まった。来年はもっと増える。それから、丸亀市も手を挙げてくださり、来年度、丸亀市立の保育園に、年間数回派遣する。県下周辺市町からの、この事業をやってみたいというオファーが当法人の方にも増えてきている。

### 【会長】

ありがとうございます。

この芸術士派遣事業というのは、全国的にも注目を集めていて、私が知る限り、京都市や金沢市も類似のものが始まっている。特に保護者から非常に関心を持たれており、保育関係者からすると、専門用語だが、「非認知教育」というか、認知と非認知をかけて、いわゆる感情とか感性、そちらを伸ばすということの教育に非常に効果があるという。

ただ、お話にあったように、オミクロン株が、特にワクチンを接種していない幼児、或いは小学校低学年で急速に広がっているために、この事業実施に困難を伴う。コロナが収まってくると、新しい可能性として開かれてくるようにも思う。どうもありがとうございました。

こどもプロジェクト関係では、高松市美術館子どもアートスペース事業もあるが、これについて、何かご質問とかご意見がありましたら。い

かがでしょうか。

【委員】

意見ではないが、美術館に伺ったときには、必ず子どもたちのスペースも見るようにしているが、感染症対策などもかなりきちんとしていて、利用者が安心安全に使えるということを心がけておられる。この2年間、様々なオンラインのプログラムであったり、閉館・休館の時期もあったりしたけれども、市民の方たち、或いは一般の方たちにオープンにできるような活動というのをずっと続けてこられたというのは、大変素晴らしいことだなと感じている。

【会長】

ありがとうございます。

それでは2番目に、工芸プロジェクトについて説明があった。特に、高松盆栽の郷を核とした事業について説明があったので、これに関わってご意見いただきたい。いかがでしょうか。

【委員】

高松盆栽でプロジェクトやっていただいているが、県主導の県産品でリモートショーなども行っていて、盆栽でいえば10年前からリモートの商談はあったが、今回の取引で新たなEU圏内で2か国と取引もし、多くの注文いただき、新たな方向性が見えてきたと思う。思いのほか金額もまとまって、何百万円単位で取引もできたので、僕らの年代だけではなく、年配の方も参加して、デジタル技術を上手く使えない方でも、リモートの取引できたら良いことだと思う。

また、高松ブランドということで、僕らも盆栽に「高松」という名前をいかに浸透させるか、海外で知ってもらおうかというのが1つの課題で、神戸牛みたいな厳格な基準がないので、非常に痛し痒しなところだが、基準をいかに仲間内ですり合わせしていくかというのは、この内々の課題としては最大の問題点だと思っている。庵治石もそうだし、高松盆栽をいかに知ってもらおうかというのは、次の課題である。

先日、香港にも出荷して、向こうのビジネスパートナーから、タグをぶら下げて欲しいと要望があり、そのタグには、「高松盆栽」と書ければよかったが、先方からの要望で、「日本盆栽」と入れて欲しいと言う

ので、こちらでタグを作って、「日本盆栽」と「中西珍松園」というタグを作らせてもらって、全部につけて出荷した。

それで今、県と打ち合わせしているのは、電子タグに何か高松の情報を入れ込んで、観光なり、他の特産物なり、その電子タグに可能性を見いだせないかなと。今の状態では、その電子タグに取引データを入れているが、「高松盆栽」の盆栽に付ける電子タグの可能性がどうか広がったらなと思っている。

【会長】

ありがとうございます。

先ほど、事務局の説明では、「盆栽の郷を核とした盆栽ツーリズム」という言葉があったが、これは何か関係されているか。

【委員】

特に関係はないが、今年はコロナ禍での瀬戸内国際芸術祭が開催されるが、いかに観光客に内陸に来てもらうかということが課題で、内陸観光に壁をすごく感じている。極端な話で、瀬戸内の島々を1日休ませてあげるみたいなアイデアで、鬼無や屋島、塩江といった内陸の観光地にいかに足を運んでもらうか。そういった壁を打開してもらいたい。

【会長】

今年は、瀬戸内国際芸術祭の開催年である。コロナが収まってくれば、国際的なツーリズムの可能性が開けてきて、それを海から陸へという中で、「盆栽ツーリズム」というのもあるということだった。

先ほどのお話にも出ましたが、庵治石の関係ではいかがか。

【委員】

石に限らずだが、このコロナ禍で今、随分、各産業・商業も弱体化してあって、この影響は数年は少なからず残ると思う。いかに見てみてもらうかということだが、展示会も中止になったし、今、石あかりロードをどうしようかという検討中だが、なかなか思うように動けない。ただ、例として、流美術館の理事をやっているのだが、昨年12月にコロナに配慮して、見ていただいたが、予想の6倍ぐらいの人が来られて、もちろん、できるだけ密にならないようにしたが、やはり、皆さん、外

に行きたい、足を運びたい、観光をしたいっていう思いは、僕らが思っている以上に、相当あるのではないかと。だから、コロナ禍がいつ明けるかは分からないが、そこへ向けて、オンラインでの商売やインターネットを通しての広報活動を考えていくことは大切なことだと思う。庵治石の広報活動などの準備もしている。ただ、どうしても各業者息切れし始めるので、もどかしい思いではある。

屋島の山上観光交流拠点施設に関して、まだ、あまり広報できてないようにも思うし、指定管理者が、県外の業者になったので、高松に来られるのかどうか、心配しているが、とりあえず来るべきコロナ明け、もしくはオンラインで商売ができるようなものを考えていくしかしょうがないと思う。

【会長】

ありがとうございました。工芸プロジェクト関係で他にあるか。ないようであれば、食のプロジェクトの方に移りたい。こちらの方でご意見ある方お願いしたい。

【委員】

食じゃなくて盆栽の方でいいか。今、私は神戸大学大学院で、地域ブランド、ブランディングの研究をしていて、広島大学では地域ブランドの講師をしているが、地域団体商標、地域特産品ブランドはご存知だろうか。

【会長】

産地証明ですよ。

【委員】

香川県は地域ブランドの商標が取れている数がかかなり少ない。自分が開発やプロデュースをしている「まんのうひまわりオイル」に関しては商標が取れそうで、庵治石は既に取りれている。なので、「高松盆栽」も地域団体商標を、まず取得するところから始められたらどうか。県や農林水産省の出先機関に相談したら、おそらく半年ぐらいで取得できると思う。

あと、おそらく、今のコロナ禍においては、大義名分がないと旅行し

ないという風になっているので、盆栽をふらっと見に行くということが少ないと思う。市の方で、「盆栽ツーリズム」という言葉を作られているのであれば、受入体制を作って、カスタマージャーニーマップのような、この人に電話してこういうふうに見学できるというルートを作って、ホームページに掲載したり、それをPRしたりすると、おそらく応募があるのでは。

あと、海外の人に人気がある観光地として、東京の「盆栽美術館」が、トリップアドバイザーで第2位だったことがあるそうだ。やはり、瀬戸内国際芸術祭と盆栽も非常に相性がいいというか、PRしたらそれだけ反響があるのではないかと思う。ツーリズムの受入体制を整えたり、ルートを案内する人を用意したりすればPRできるし、ジャパンプランドとして、高松盆栽をもっとPRする動きが明確にあったらいいと思う。

#### 【会長】

ありがとうございました。ぜひ参考にさせていただきたい。それでは、交流プロジェクトのところでご意見ありますか。

#### 【委員】

創造都市推進局の中に観光交流課があるが、もう少し具体的な、例えば法人格を持った、高松を中心として、直島町・三木町、それから琴電沿線の町とか、それぐらいのイメージで地域版DMOを作り、そこで今議論しているような、人づくりとか、体制づくりとか、お金が落ちる仕組みとか、当然そのDMOを運営するためのお金のまわし方も含めた、そういった別次元のレイヤーを作ってはいかがか。

それから、香川県全体のDMOがあるが、期待していたが、残念ながら県庁の中で作ってしまったので、香川県の観光推進課と、観光協会と遜色はほとんどなく、同列のDMOにしか受け付けられていない。ある方がリーダーやっていたときは、香川県で面白いレイヤーができると思っていたが、残念ながら、人は3年ぐらいで変わっていく体制なので、もっと民間主導型で、高松版DMOができたらいと思う。

#### 【会長】

民間主導で地域型のDMOを作るという提案があり、これはぜひ具体

化に向けて動いていただきたいと思います。

最近、お城のことで、テレビで取り上げられていましたが、何か交流プロジェクトに関わって、ご意見ありませんか。

#### 【委員】

平成26年になるが、金沢市の方に視察に行ったときに、すごく感動したのが、ボランティアガイド「まいどさん」という取組だった。「ボランティア大学校」という人づくりの取組が、まいどさんを生み出している。

高松市の来年度の予算とかを見ていると、どちらかというイベント自体に予算を使われている、又は、計画されているような項目が多いような印象を持った。もちろん減らすとかそういうことではなく、一方で、こういった活動を起こしている人たちを育てたり、或いはそのコミュニティを形成していくような取組に対して、もう少しこの継続的な予算というのを、配分していくべきだと思っている。つまり、人づくりに対する、創造都市のプロジェクトだったり、予算だったりというところが、ちょっと抜けているのではないかなというのは、以前から思っている。じゃあ、具体的にどうするのかというところの、話し合いもないと当然できないので、例えば、金沢のボランティア大学校とか、或いは人づくりに関して、こんな取組をしたらいいのではないかなど、もしアドバイスをいただければ。

#### 【会長】

今、お話に出た「ボランティア大学校」は、これは、特に金沢の歴史だとか、文化に関心を持って来られる方々が大勢おられて、それで観光のボランティアとして、まいどさんというグループが出来ている。英語を話せるまいどさんもおられる。

そういうシステムというのは、創造都市事業の前から金沢市がかなり取り組まれているということがありますし、それから、「金沢市民芸術村」というのが、20世紀の終わりに立ち上がっている。そこは職人大学校というものが併設されていて、職人の養成を無料でやっている。そこで卒業した人たちの仕事として、傷んだ町家を再生するとか土塀を再生するとかっていうことで、都市景観の再生につながってくる。すべて事業が一貫している。

だから、中心のところに人づくりというか、或いは技を継承していく  
というか、そういうものがあると、ずっと継続的な事業を安定的に実施  
できるということになる。一過性のイベントの事業というよりは、やは  
りベースは人づくりだが、そういったところに予算を付けるというこ  
とは、とても意味があると思っている。ご意見ありがとうございました。

他に意見がなければ、実は、私、今年の1月の終わりに北川フラムさ  
さんと奥能登で一緒した。その時は、ちょうど奥能登国際芸術祭の関連  
でシンポジウムをしたのだが、奥能登のケースは、2020年の開催で  
準備してきたので、コロナが流行る前に、作品を作るアーティスト達が  
現地を訪れていて作品ができた。ただ、コロナになって1年延期し、そ  
の中でも、オリンピック終わった1ヶ月後の、去年の秋の一番安定した  
時期に開催して、全員がリストバンドで陰性であるという証明するよう  
な形で、非常にしっかりしたコロナ対策をやったので、クラスターなど  
が発生することはなかった。

今回、瀬戸内国際芸術祭の場合は、事前にアーティストが現地に来ら  
れないで開催するということになる。それから期間も3期に渡るが、事  
前のチケット販売やパスポートの販売もコロナの流行状況によっては、  
突然取り止めになったりすることがある。そういうリスクがあるという  
ことを、心配しておられた。

しかし、芸術祭というものを継続開催していく中で、瀬戸内の再生や  
或いは高松市の活性化というものが、順調に進んできているので、ぜひ  
いろんな知恵を出して、成功させていただきたいと思う。

こういったことに関して、何かご意見があるか。

#### 【委員】

瀬戸内国際芸術祭に、直接に関連していないが、全体的に1つすごく  
思っているのは、海外に向けてアピールするために、ターゲットの人た  
ちの言語にもっと配慮が必要だと感じる。例えば、エクスペリエンス高  
松とか、そういうサイトを見ると、英語は悪くないが、相手をすごく期  
待させるという内容でもない。多分、英語に長けている日本人や、こ  
ういうことを書いてくださいとただ言われている英語の方が書いている可  
能性がある。予算のない中で高松を愛している、その国の言葉のネイテ  
ィブの人に、その視点でもうちょっとコピーを書いてもらえるようにで  
きたらいいなと思う。

私は日本に43年いるが、日本語で何かコピーを書くというのはとんでもない。日本人の心には通じていないと思うので、そういう方を活用ができたらいいなと思う。

私であれば、ボランティアでもいいので相談したり入ったりすることもできる。

【会長】

ありがとうございます。ぜひボランティアでご協力よろしく申し上げます。

【委員】

中央卸市場の市場フェスティバルが昨年、中止になったり、特別開放も中止になっていたりするが、うみまち商店街、市場の中のテナントはかなり埋まっており、知名度も上がっている。訪れる方も増えていると感じている。しかし、最近は駐車場が足りないように感じている。せっかくテナントが入ったのに、テナントを埋めるだけのお客様の車が収容できていないのではないかと。ぜひ、駐車場の対応をしていただきたいと思う。

【委員】

先ほどお話の中で、内陸部、屋島へなかなか人が来ないという話も出ていたが、今回、瀬戸内国際芸術祭があるが、これを見る限り、女木島・男木島・大島・高松港、海に面した辺りしか会場に指定をされていないようだが、高松市として、例えば、玉藻公園、栗林公園、仏生山、この松平関係の縦のラインというのを、瀬戸内国際芸術祭のみならず、これからもアピールしていくようなおつもりはないのか。この縦のラインのヒストリーをブランディングしていくようなおつもりはないのかと思った。

今は、中野武営の顕彰の取組も始まっているが、この中野武営は経済人ではあるが、その文化への貢献度も高いという点から、こういう事業として、この辺りをアピールしていったらどうかと思っている。

【会長】

陸に向けた取組については、後ほど、市役所の担当の方からお答えい

ただくことにする。

他の方で今日ご説明があった取組について、全体として何かご意見ありますか。

**【委員】**

高松市文化芸術ホール改修事業について、私自身もサンポートホール高松をよく利用している。サンポートホール高松が改修工事によって2年間使えなくなることによって、高松駅周辺が、週末とか平日の夜とか、人の動きが減ってしまうということが考えられる。県民ホールも数年前に改修工事があったが、その時は、ホールのすぐ近くには何かがあるというわけではなかったもので、使えないのかぐらいで終わっていたが、今回のサンポートホール高松は、駅の近くということもあり、港にも近いということもあって、人流がどのように変わっていくのかと。閑散とするのではないかと思ったり、毎月マルシェが日曜日に行われたりしていたが、なくなったりすると賑わいが減ってしまうことが考えられると思う。

また、利用する側として思ったことが、周辺の案内などをサンポートホール高松からしていただくが、もっと親切にいろいろ教えていただきたい。ホールを使う側の身としては、こういうホールなのでこういうことができますというのが分かればいいと思うが、せっかく他のホールと連携をとるようなことがイメージとしてできるのに、何かそこをうまく利用していないような気もして、最長2年で工事が終わって、利用者が返ってきたとしても、それをもっと魅力的なものとして、新しくなったから使うというのはあるかもしれないが、やっぱりここがいいねと思ってもらえるような流れを、今のうちに作っておくべきじゃないかということも思った。例えば県民ホールは、民間の指定管理者が、そういうノウハウを持っているところもあるかもしれないし、そういうところを生かすことができれば、ホール事業をやりたい団体の人たちにとったら、この2年間も有意義に過ごせるのではないかというふうに思ったりしている。

**【会長】**

これはまた最後、市役所の担当の方からお答えいただきたいと思う。

それでは、一旦ここで議論を仕切りまして、今日は第5期U40の穴

吹会長が来ておられる。前々からU40の活動についても、ぜひ聞きたいという意見がありましたので、穴吹会長からU40の動き、取組についてご説明いただきたい。

【ゲスト（第5期U40会長）】

改めまして、第5期U40の会長を務めさせていただいております、穴吹英太郎と申します。

U40は、任期は2年間で、民間の事業者や市民団体の方、そして市の若手職員で構成される組織で、高松市創造都市推進懇談会改めU40という形で、現在23名で活動させていただいている。

今までの実績として、現在私が務めさせていただいているのは第5期だが、私は第4期から参加していて、U40はちょうど10年目の組織になる。

錚々たる諸先輩方が参加されて、2年の任期で務めている。私が参加を決意したのも、第3期の先輩方の事業を見たことがきっかけになる。懇談会という名前ではあるが、市政の意見や提言にとどまらず、実際に事業を行うなど、「非常に参加意識が高いU40世代が参加していること」が大きな特徴だなと思っている。

以前の先輩方が行った具体的な事業例として、産業振興課で所管している「たかまつ工芸ウィーク」はU40の発案で始まった事業であり、日本パラ陸上の屋島の陸上競技場で行われた時の受け入れに際して作成されたハンディキャップのある方向けのマップ作成などが代表的。マップ作成については、NHKの全国放送で取り上げられるなど、いくつも実績を残している。

ただ、これもたった2年間のうち、10回程度のスケジュールと予算の枠内で行っており、実際は各委員の積極的参加のもとに多分な役割負担で実現したことでもあったので、いいところでもあり、改善点でもあるってところである。

では、この現在第5期は何をやっているのかというところだが、私が参加していた第4期では、ちょうどコロナ禍に直面したところで、開催が非常に難しくなり、なかなか思うような実績を残すことが難しかった。その反省も踏まえて、オンラインでなかなかメンバー間のチームワークもつくれなかった中で、丁寧にチームビルディングを行ってきたのが、第5期U40の前半だった。

最初に、市の政策課の方に来ていただいて、我々U40世代が直面する将来課題の共有から始めようということで、2040年問題について考えた。決して楽観視できない事実に向かって、我々現在何ができるのかというスタートラインを共有した。そこから、では高松市としてどういう、高松らしさって何だろう、選んでもらえる、移住なのかそれとも交流人口なのか、そういったときに選んでもらえる都市として、我々、高松市、自分たちの街をどう思っているのかということ、言語化するということに取り組んできた。

その中で、ただ端的に自分のことを考えようというのは難しいので、世界の先行事例を勉強した。例えば、フランスのナントだったり、アメリカのポートランド、また、北海道の美瑛の事例だとか、その都市の特徴だったり、市民が主体となった活動っていうところにおいて、創造的に、すごく難しい街の状況から、V字回復した都市の事例を勉強して、高松だったらっていうところで考えてきた。

キャッチコピーを作るというのを、3回にわたってやってきたが、これは大変気づきの多いワークだった。その合間に、昨年12月末に、西成先生に来ていただいて、高松らしさの源泉となる歴史と文化についても教えていただき、いろいろ思考を深めた。

まず前半としては、情報のインプットとキャッチコピーの作成という点で、高松らしさを考えていったが、例えば、私は観光業に携わっていて、宿泊施設の運営をしているが、私のキャッチコピーは「高松×観光」を、他の委員だったら「高松×子育て」だったり、いろんなテーマ設定の中で自分たちがやっている専門分野の中で、課題って何なのか、それを解決するためにキャッチコピーを考えようっていうプロセスをやった。

最終的に出てきたキャッチコピーのプロセスの中には本当に面白いところがあり、肝としては、この課題感、高松イコール海町であることが認知されていないということが課題だと思ってる私はというところは、各いろんな方面の分野にいる方、また、市役所の若手職員の人たちの思いを知ること非常に面白さを感じましたし、非常に多様性を感じるプロセスだった。

実は、その2年間の任期で10回しか集まれない、なおかつ、コロナと戦いながらやるというところの非常に制限を感じる中で、あがいてるところだが、その中で何か成果を残していきたいということで、後半としては、アンケートの作成をして、会議室以外のU40世代の意見を拾

ってみようじゃないかということ、今取り組もうとしている。

最終的に、大西市長に、その回収結果だったり、分析を発表させていただいたりして、今期を終えられたらと思っているが、我々、U40世代は、人口構成で言うと、完全にその少数派、マイノリティになるので、どうしても政治への関心が低くなったりだとか、声を上げても届かないんじゃないかと。あまりよくない、負のスパイラルが起こりつつあるが、幸い高松市というのは、このU40世代に向けて、U40高松という、市政に参加する高松市の公認の窓口っていうのが設定されている。私たちはその役割として、若者と市政のつなぎ役になるようなことができれば、いいのではないかと。

事業を提案するということも非常にいいんですけども、結局、2年単位の制限っていう任期があるので、任期とともに人が変わってしまえば、やってることがまた変わってくるっていうのは非常に継続性がないと。

一方で、2040年問題、そういった地域の課題に対して、長期的に取り組んでいかなければいけないのに、2年単位でやるってことは非常にディスアドバンテージだということと、何か積み上げて残していけるものはないかなという中で、U40世代の意見をもう少し見える化させていくということは、我々だったらできるのではないかなと思っている。本当に、もう限られた回数、人の資源っていうところもあるが、できれば、このアンケートの取組、来期も続けていただくような形にして、若者にとっても、市政とのコミュニケーションができてるんだということを認知してもらい、関心を持ってもらう。そして、市政に対しては、若者はこういうニーズを持っている、例えば、高松市内で遊びに行くところがないという意見も委員の中から出た。

それは、私がまだまだ小さい頃は商店街も非常ににぎやかで、遊びに行くところであったが、やはりフェーズが変わってきて、今の世代の若い子たちの声というのは、あまり聞こえてないんじゃないかなということもあるのでは、なのであれば、我々が、そういった中で、彼らの意見が見える化していくということに存在価値があるのではないのかなというふうに思って、そういった新しいコミュニケーションを生み出すというのが、現在のテーマだなと思いながら、U40の事業を、会を進行させていただいている。

【会長】

どうもありがとうございました。U40の方々が社会のマイノリティであるというのは、確かにそうだ。私の世代というのは、団塊の世代だったので、マジョリティである。数が大きいので、社会にいろんな意見をぶつけてきたというのがあるが、今のU40のようなマイノリティがどういうふうに行動するのかというのもまた、創造都市の中で大きな課題になるかもしれない。

私の方からは、できれば5期にわたるU40の方々が一堂に会したU40大会のようなものやっていたらいいと思う。コロナの中では難しいので、コロナが収まった頃合を見て、そういった、U40大討論会のような、メンバー全部そろってやるのもいいかもしれない。それから、そもそも創造都市推進審議会を始めたときに、U40というものを組織して、いずれ、そのU40委員から、審議会委員に入っていたかと。つまり、審議会委員の世代交代をやったらいんじゃないかということも考えていたので、そこら辺の継続性とか、世代交代というようなことも、これから課題になってくると思う。

穴吹会長、ありがとうございました。

残りの時間、皆さん、ご意見質問が出ていましたので、市役所の担当の行政の方から一旦お答えいただけるものはお答えいただいて、まとめに入っていきたいと思う。

高松市の担当の方、お願いいたします。

【事務局（市場管理課）】

うみまち商店街の駐車場が不足している話があった。

現在、全ての店舗が埋まり大変賑わっている一方で駐車場が不足しているという問題も発生している。限りある施設の広さにはなるが、今後、時間をずらしてきていただく啓発を行うとか、他にも駐車場の満車状況を解消できるような取組を考えてまいりたい。

【事務局（文化芸術振興課）】

本年は瀬戸内国際芸術祭の年であり、玉藻公園、栗林公園、仏生山法然寺、そういった松平家に関する縦のラインのブランディングについて質問があったことについて、創造都市推進局文化芸術振興課、文化財

課、観光交流課が関係している。玉藻公園については、来年度の瀬戸内国際芸術祭の会期中に、桜御門が完成する予定である。こういったところで、瀬戸内国際芸術祭のお客様にもつながるようなPRをしたいと思う。栗林公園については、過去の芸術祭においても、瀬戸内国際芸術祭の実行委員会も含めて、イベント等を積極的に行っているところである。仏生山法然寺については、数年前になるが、さぬき市の霊芝寺の墓所と共に、仏生山法然寺の墓所が国の史跡にもなっている。こういった3つの松平家に関する貴重な文化財であったり、観光資源であったりする場所なので、瀬戸内国際芸術祭の機会を捉えて、関係各課でPRしたい。

中野武営のPRについては、今、顕彰会の方で銅像の制作に向けた準備を行ったり講演会を行ったり、冊子の作成などもしている。渋沢栄一が、大河ドラマで取り上げられたように、中野武営も香川においては同じような役割をした人物だと認識している。そのようなことから、創造都市推進局、特に文化・観光・スポーツ部においてPRをしたいと思っている。

続いて、サンポートホール高松休館中のサンポート周辺のご提案に関してのお答えだが、現在、サンポートホール高松では、来年度からの休館について、利用者の方に対して、アナウンスしているが、今回の意見も踏まえて、より丁寧にしたいと思っている。一方、休館中ではあるが、1階の市民ギャラリー、同じく1階のコミュニケーションプラザは引き続き開館している。

サンポートホール高松の活動というのは、ホール内が今までは中心であったが、今後は、市民ギャラリーでのイベントであるとか、アウトリーチ、ホールから出かけて市民の方に文化芸術を楽しんでいただくという機会の創出も重要だと思っている。

あと、これはホールの事業ではないが、文化芸術振興課や観光交流課では、サンポートホール高松周辺、要はサンポートエリアでのイベント等もやっていることから、現在コロナ禍で縮小してやっているものが多いが、従来通り音楽のイベントであったり、パフォーマンスであったり、そういったものができるように、今後も計画してまいりたい。

【事務局（農林水産課）】

盆栽について、お話のありました電子タグについては、今後事業を行

っていく中で、検討していきたいと考えている。

高松ブランドの基準を定める課題というのは、市の方も認識しており、地域団体商標も以前、検討としたことはあるが、今後、地域団体商標については、県とも連携して検討してまいりたい。

盆栽ツーリズムであるが、これもいただいたご意見を十分参考にさせていただきながら、今後の事業の方に、取り組んでまいりたい。見学ルート、マップ等をこの辺りもまた参考にさせていただければと思う。

#### 【会長】

はい。ありがとうございました。

チャットの方でもいくつか提案が出ておりますので、これもご覧ください。U40の方への提案だったと思いますが、お話になりますか。

#### 【委員】

今、短歌がブームなので、自治体のキャッチコピーの研究をしていて、自治体のキャッチコピーが全部載っている本では、「もっと高松」とか短いのが多かったので、31文字ぐらいで表現した方がもっと魅力が発信できるし、短歌が初めて自治体のキャッチコピーになったよというので宣伝にもなるのではないか。

あと、質問だが、玉藻公園は高松市が管轄で、栗林公園は香川県が管轄だと思うが、松平の3つの場所のストーリーを、1枚にしたような、何かブランディングサイトみたいなのは、現在あったりするか。県と市で、公園の管理が違っているけれど、それがPRするのに少しハードルになっているのではないかとこのところ質問である。

#### 【事務局（文化芸術振興課）】

玉藻公園は高松市が指定管理者制度を導入して管理をしている。一方、栗林公園については、香川県の方で、一部民間が入っている。法然寺については、寺院側ということで、それらを一つにしたようなPRはなかなかできていないところである。

ただ、観光交流課では、エクスペリエンス高松において、玉藻公園や栗林公園の紹介をしているが、関連付けて仏生山の法然寺までというところが、今できていないところである。松平家に関係する3つの観光地であったり、文化財である場所が縦のラインであるということは、非常

に重要なポイントだと思っているので、今後、意見を参考に何がPRできるかと思っている。

【会長】

ありがとうございました。他に意見などはあるか。

【副会長】

資料3の中で、取り上げた美術館やその他の事業もすべて子どもたちが参加している。子どもたちがこれだけ楽しそうに参加できる取組みというのが、本当にこれからの高松市の未来を描いてるような気がしていて、私は未来ある子どもたちがこれだけ活発な様子を伺えることは、この高松市の未来は明るいのではないかというふうに思っている。

高松市は、スマートシティに取り組みながら、さらにスーパーシティにという構想を持っていて、高松市長は、その準備チームとして、DAPPY（ダッピー）を設置なさったと、この間広報に書いてあったので、これはとても大事なことだと思うし、これを進めていただけたらいいと思う。10年も前から存在していたU40の説明と、これからの取組みとか、穴吹会長の上手なご説明でよく理解できた。頼もしいと思った。

また、コロナウイルス感染症の中で、子どもたちに劇団四季のミュージカルをオンラインで配信している。こういうのをぜひたくさん配信していただけたらと思う。本当に、この創造都市というのが、すごく良い方向に向かっているのではないかと、本当にそう思った。

【委員】

コロナ禍においてイベントとか行事も、最近は少くないなとは思っている。実際に会場に足を運んだ時に、感染対策がきちんとできている団体と、あまりできていない、あまり気にせず開催している団体があると感じているところもある。

イベント開催のガイドラインっていうのが県から出ていると思うが、ガイドラインというのは香川県のガイドラインに従うべきなのか、高松市からは発信しないのかという質問が出たが、今まで香川県の方の意見しか聞いたことがなかったので、この機会に高松市のご意見も聞けたらと思う。

【事務局（文化芸術振興課）】

ご意見ありがとうございます。

基本的に高松市のイベント開催につきましては、国のガイドラインであつたり、県のイベントの開催基準に基づいている。

ただ、これはベースであつて、例えば音楽であつたり、演劇であつたり、それぞれ業種別のガイドラインもあり、それに基づいて開催しているというのが現状である。ただ、そのガイドラインだけを守れば安全にできるかというところだが、やはり我々としては、例えば年齢層によって、イベントによつても違ふとは思ふ。子どもが多いイベントであつたり、高齢者の方が多いイベントであつたり、或いはホールではなくて屋外でやるイベントであつたり、そういったガイドラインだけでは十分に読み取れない部分については、保健所の専門家のご意見を聞きながら、それであればガイドライン通りでいいよとか、もっと人を減らした方がいいんじゃないかとか、そういったご意見をいただきながら、今やっている状況である。

いずれにしても、我々コロナと付き合いだして2年以上経っている。実際に、文化芸術をなんでもかんでも止めるというよりも、ガイドラインを守りながら、文化芸術を鑑賞していただき、そういった場を創出することも、重要だとこの2年間感じているので、これからもガイドライン、基準を守りながらも文化芸術活動を行つてまいりたいと思つている。

【会長】

全世界的に、芸術文化部門つていうのか、これがかなり体力を削がれてしまつていて、風前の灯だというところもある。秋田のわらび座という民俗芸能の劇団も、秋に倒産してしまつて再建の途上である。なので、やはりコロナの先の展望をしっかりと開いていきたいし、それから、必要な財政的な支援、これはぜひ厚くしていただきたい。

スマートシティとかスーパーシティつて、それ自体は主に技術である。DXだとか、これが先行しているように見えるが、私はやはり、人間の顔をしたスマートシティと言うか、もっと人間の創造性を大事にしたスマートシティであるべきだと思つていて、そういう意味では創造都市というものが軸にあつて、スマートシティやスーパーシティも成功するのではないかと思つているので、この審議会が、そしてU40の皆さま

んの活躍が、これからの高松市の、コロナ後の展望を開いていくということになっていくと思うので、引き続きよろしくご支援をいただきたい。

【委員】

提案ですが、U40と審議会とお互いに交流を持てるように、オブザーバーの形で、両方が何名か会合に出席させてもらって、交流を図れたら。例えば、U40の方が、会長も仰っていたように、この審議会の方の委員になっていただくとか、繋がりができていいと思う。

もう一つ、提案だが、「街角に音楽を」のグループが丸亀町壱番街のドームで演奏会をやっていたりするので、高松市美術協会が主催で一般公募による「高松市民美術展」を毎年4月上旬に開催しており、美術館のエントランスホールをご利用いただいて、美術展の1週間の合間で演奏会を開いていただくと。そうしたら相乗効果で、来客が増えるのではないかなと思っている。以前から考えているが、また提案を出させていただいて、それが実現できるかどうかご検討いただけたらと思う。

【委員】

質問が2つあって、瀬戸内国際芸術祭に来場する人が内陸部までは来られないことが課題となっているとの議論があるが、海と陸をつなぐ魅力的なツアーなどの企画を民間の旅行代理店で実験的に販売されている事例は過去にないか。また、市内の美術館やホールが連携して、情報発信をされることや「たかまつ工芸ウィーク」ではないが、もう少し大きな括りでパフォーミングアーツ、美術、デザインなど横断的にイベントをやられる機会というのは過去にあるか。特に瀬戸内国際芸術祭の機会に合わせて行われたことなどがあれば教えていただきたい。

【会長】

工芸ウィークのような、大きな横断的なイベントがつかれないかという提案ですか。

【委員】

提案といたしますか、私も高松行く機会が多いが、それぞれの場所でももいい企画をなさっていて、でも、それを探していく必要があると。

例えば、瀬戸内国際芸術祭の時に内陸部に人が来ないとか、いろいろなお話も今まであったので、やはり、いろいろなものがあるんだってことを顕在化というか、見えるようにしていくってということも非常に大事かなと思う。

私自身は瀬戸内国際芸術祭に毎回行っているが、こういう機会に出会ったことがないので、ないのかなと思いつつ私が知らないだけだったかもしれないし、もし、今年はこれから4月に始まるが、また今後、こういう機会っていうのを、瀬戸内国際芸術祭が開催されない年でもやっていていただけると、皆さんの注目度は、瀬戸内自体への注目度が高まっているので、瀬戸内国際芸術祭じゃない時でもあってもいいのかなと。

あと、質問の1つ目も、内陸部にも魅力的なところがたくさんある。それを繋いでいくツアーっていうのがあれば、ぜひ。おいしいものが食べられて。今日、この魅力、創造都市の中にあるコンテンツをたくさん入れ込んだような、そういったちょっと高くてもすてきなツアーがあるといいなというところである。

#### 【会長】

これはまた次回でも引き続き議論したり検討したりできればと思う。

それから委員からの提案もありましたように、U40のメンバーとの恒常的な交流といいますか、そういったことも合わせて課題として、浮かび上がったということを確認して、今日はこれにて散会したいと思います。

(創造都市推進局長から挨拶)

#### 4 閉会

(事務局から開会挨拶)